

国鉄千葉動力車労働組合

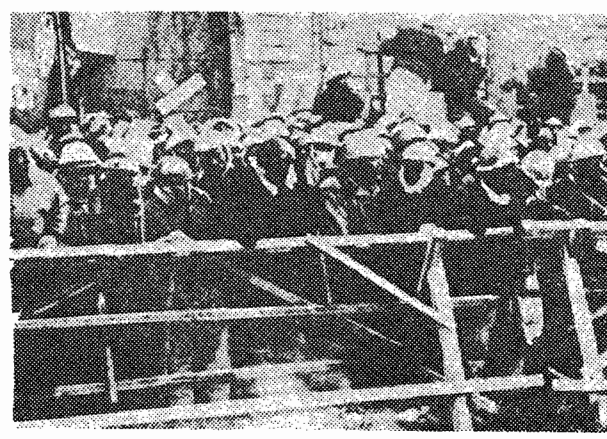
千葉市要町二一八（動力車会館）
（鉄電）二九三五、六（公衆）〇四七二、二二七二、〇七

労働学校 第二期労働学校 闘わざる敗北―炭労潰走

第二期労働学校・第十一回講座が九月二七日開催され「戦後労働運動史・その二」について労働運動研究家・大塚宏氏より「国鉄新潟闘争が切りひらいた高揚―三池闘争―六〇・七〇年安保闘争―国鉄マル生闘争」の歴史を国鉄分割・民営化攻撃と対比させ、いかに教訓化し闘いぬくのかを示された。

闘わざる敗北―炭労潰走

定員法や国鉄新潟の闘いが労働者のエネルギーを爆発寸前にまで高揚したにもかかわらず、味方内部の指導部・国労民同の裏切りによって闘いは圧殺された。しかし、六〇年安保闘争と同時に平行的な階級決戦として三池闘争は爆発した。総評民間単産の中軸であり、その精鋭部隊であった三池労組を日帝は石炭危機をあげ、三池叩きつぶしにかかってき



1214人の指名解雇通告を返上し、会社側のロックアウトに対抗して全面無期限ストに突入した三池労働者（60年1月25日）

国鉄「分割・民営化」阻止！三里塚二期着工粉碎！

た。ここでも総評民同は、安保と三池の切断に腐心し、一九六〇年、暴力団・警官隊との激突の中で七月ホッパー決戦を前に敵前逃亡を決めこんだ民同の裏切りによって「闘わざる敗北―炭労潰走」へとすさまじい後退を引き起こした。

闘う以外に労働者として生きられない

三池敗北直後から、大量の首切りが行われ、三池以外の炭労は「ストはやまをつぶす」論をもって三池が闘わなければ雇用は守れるといったスト反対の三井五山の結果はどうであったか。当時、政府は六七年までに八万人首切



「去るも地獄、残るも地獄、の看板がかかる三池労組本部前をデモ行進する三池主婦会の主婦たち（60年）

りを強行するために「炭鉱離職者法」案を可決し「政府が責任をもって」「雇用対策は万全」と首切りが容易にやれるペテンをろうしたのである。そして、三井五山のうち三山が閉山され、第一組合への差別・選別と人員は三割減！出炭は倍増のもとで低賃金をして、超労働強化へのかりたて、相つぐ合理化による首切りの推進、それは六三年十一月の三池三川炭鉱大爆発―四五八人死亡の重大事故発生とまさに「去るも地獄残るも地獄」へ労働者をおとしこんでいったのだ。労働者と資本家の関係は相入れないのであり、闘う以外に労働者として生きる道はない。闘わないで何んとかなるなんぞは敗北の道しかないことを歴史が証明している。

座して死を待つより 起って反撃へ

七十年、国鉄財政危機を理由に「再建合理化」をかかげた磯崎総裁が誕生、能力開発課を設置し、マル生教育の推進を強行してきた。管理者・鉄労を中心としたマル生グループによる国労・動労切り崩しが行われた。七一年八月、国労函館大会では「本部方針は生ぬるい」「柔軟戦術では組織は破壊される」と怒りの声

職場からの反撃が開始された



マル生大会をめぐる激突 〇年10月、大塚に中川委員長は「座して攻撃にさらされるよりは立って反撃に転じよう」と宣言し、マル生粉砕闘争に起った。マル生攻撃は、一人ひとりの労働者に当局側につくのか組合側につくのか二者択一を迫り、組合側につけばあらゆる面で差別を受けるぞーという攻撃だ。仲間を裏切り当局に走ったマル生分子に対する徹底した追及・糾弾の闘いが職場で展開され、不当労働行為摘発運動は当局を敗北に追いこんだ。

マル生粉砕闘争は、全国鉄労働者に得がたい経験を与えた。全組合員が労働者とはなにか、組合とは何かを、かつてなく真剣に考えざるを得なかった。そして全組合員が悩み、苦しみ、迷い、最終的に組合の旗のもとに結集したのである。

国労組合員の偉大な 決起はじまる

マル生闘争に勝利した。しかし動労革マルは、今日では当局の手先となつて屈服・腐敗し、国労民同は安定的労使関係を求め、それが戻ったことに安住し、労働貴族として腐敗しきり、国労つぶしの攻撃の中で今、労使共同宣言を結び、分割・民営反対の旗をおろそうとしたが、闘う国労組合員の怒りの決起で粉碎された。この闘いは大きい意義を持つものだ。確実に反撃が開始された。いまこそ闘いが求められている。と述べられ終了した。